

特別賞 丸善雄松堂賞

『多様な「性」がわかる本』 伊藤悟, 虎井まさ衛編著

文学部 文学科4年 山田拓磨

2017年10月25日、岩波書店「広辞苑」の新版の発表がありました。追加された語句の中には、LGBTの項目もあります。広辞苑や他の多くの辞書は、90年代まで同性愛を異常性欲としていました。インターネットも発達していなかった時代、辞書は数少ない自力で調べられるツールです。性に悩む彼らが“自分が何者なのか”と辞書を引くと、自身を全否定する文章があったのです。

それが今では、辞書の中だけでなく、世界中の活動家から芸術作品にまで多くの”性の形・あり方“が見られるようになりました。こんな時代だからこそ、性的マイノリティについて関心のある学生や自身の性をより知りたい学生も多くいると思います。そんな方に本書をおすすめします。

本書は3部構成になっています。1部は「性同一性障害」「ゲイ」「レズビアン」の11名の手記です。彼らは文学に携わる者でないにもかかわらず、どの手記も読みやすく、平易でありながら、当時の感情がまざまざと蘇るような豊かな文体です。

例えば、本当の性を偽わり、周囲を欺いていることに四六時中罪悪感を抱え続けている男性の話や、外社会では新しい性を謳歌していても、両親の前ではどうしても「息子」を演じてしまう女性の話です。どの手記も10ページ程度なので、肩ひじ張らずに読み進めることができます。

2部は、編著者を含めた4名の座談会の様子が書かれおり、1部が“小さな個人”の話だとすれば2部は“活動家たち”の話です。

3部は、伊藤悟氏による「多様な性を理解するため」の論文と、専門用語の解説が続きます。全体を通して、誰に対しても親切で分かりやすく、硬軟合わせた書籍です。

本書を読めば、広辞苑にLGBTが追加されたという事実が、全く変わって見えてくると思います。LGBTを認め、辞書に記載することは、リベラルな時代の象徴では決してなく、多数派による「あなた達のことを認めるけど、私たちとは違う存在だから、一線を引きましょうね」と区別するためのタグを用意したにすぎないのです。

もちろん、90年代以前の性的弱者を全否定する社会と比べたら、一歩進んだレッテルと言えるでしょう。ですが、本書に出てくる15名は、LGBTと言っても、異なる悩み、価値観を持っており、同じ括りでまとめることはできません。

同時に、多数派であっても、生まれ持った性・好きになる人の性・社会の中で求められる性・外見や服装をどうしたいかの性に、誰しも一度は悩んだことや疑問を持ったことがあると思います。

すなわち、性とは同じに見える色でも、ほんの少しずつ色の異なるグラデーションのように、全く同じ性のあり方で生きる人などいないのです。ゆえに、性の二元化の枠に囚われたり、誰かの価値観で自分の性について悩む必要なんてないのです。私は、本書を読んで、そんなカタルシスを体験しました。ぜひ、みなさんにも、開けた未来を見せるような優れた入門書としておすすめします。